

夢野久作全集



三一書房

夢野久作全集 4

一九六九年九月三十日 第一版第一刷発行

一九七四年七月三十日 第一版第五刷発行

編者 中島河太郎・谷川健一 ©杉山龍丸 一九六九年

(第五刷について著作権者
杉山龍丸氏の許可を得た)

発行者 竹村 一 発行所 株式会社三一書房 東京都千代田区神田駿河台二の九

郵便番号一〇一 電話東京(二九一)三二三一〜五番 振替東京八四一六〇番

印刷所 暁印刷株式会社 製本所 株式会社鈴木製本所

目次

ドグラ・マグラ 5

解題（中島河太郎） 381

解説対談（なだいなだ・谷川健一） 389

夢野久作全集 4

ド
グ
ラ
・
マ
グ
ラ

卷頭歌

胎児よ

胎児よ

何故躍る

母親の心がわかって

おそろしいのか

.....ブウウ.....ンンン.....ンンン

私がウスウスと眼を覚ました時、こうした蜜蜂の唸るような音は、まだ、その弾力の深い余韻を、私の耳の穴の中にハッキリと引き残していた。

それをジツと聞いているうちに……今は真夜中だな……と直覚した。そうしてどこ近くでボンボン時計が鳴っているんだな……と思い思い、又もウトウトしているうちに、その蜜蜂のうなりのような余韻は、いつとなく次々に消え薄れて行って、そこいら中がヒッソリと静まり返ってしまった。

私はフツと眼を開いた。

かなり高い、白いペンキ塗の天井裏から、薄白い塵埃に蔽われた裸の電球がタッタ一つブラ下がっている。その赤黄色く光る硝子球の横腹に、大きな蠅が一匹とまっていた、死んだように凝然としている。その真下の固い、冷めたい人造石の床の上に、私は大の字型に長くなって寝ているようである。

……おかしいな……。

私は大の字型に凝然としたまま、臉を一パイに見開いた。そうして眼の球だけをグルリグルリと上下左右に回転させてみた。

青黒い混凝土の壁で囲まれた二間四方ばかりの部屋である。

その三方の壁に、黒い鉄格子と、鉄網で二重に張り詰めた、大きな縦長い磨硝子の窓が一つずつ、都合三つ取り付けられている、トテも要心堅固に構えた部屋の感じである。窓のない側の壁の付け根には、やはり頑丈な鉄の寝台が一個、入口の方向を枕にして横たえて在るが、その上の真白な寝具が、キチンと敷き展べたままになっている処を見ると、まだ誰も寝たことがないらしい。

……おかしいぞ……。

私は少し頭を持ち上げて、自分の身体を見廻してみた。

白い、新しいゴワゴワした木綿の着物が二枚重ねて着せてあって、短いガーゼの帯が一本、胸高に結んで在る。そこから丸々と肥って突き出ている四本の手足は、全体にドス黒く、垢だらけになっている……そのキタナラシサ……。

……いよいよおかしい……。

怖わごわ右手をあげて、自分の顔を撫でまわしてみた。

……鼻が尖んがって……眼が落ち窪んで……頭髮が蓬々と乱れて……顎鬚がモジャモジャと延びて……。

……私はガバと跳ね起きた。

モウ一度、顔を撫でまわしてみた。

そこいらをキョロキョロと見廻した。

……誰だろう……俺はコンナ人間を知らない……。

胸の動悸がみるみる高まった。早鐘を撞くように乱れ打ち始めた……呼吸が、それにつれて荒くなった。やがて死ぬかと思うほど喘ぎ出した。……かと思ふとまた、ヒッソ

りと静まって来た。

……こんな不思議なことが在ろうか……。

……自分で自分を忘れてしまっている……。

……いくら考えても、どここの何者だか思い出せない。

……自分の過去の思い出としては、たった今聞いたブウ——ンンンというボンボン時計の音がタッタ一つ、記憶に残っている。……ソレっ切りである……。

……それでいて気は慥かである。森閑とした暗黒が、部屋の外を取巻いて、どこまでもどこまでも続き広がっていることがハッキリと感ぜられる……。

……夢ではない……たしかに夢では……。

私は飛び上った。

……窓の前に駆け寄って、磨硝子の平面を覗いた。そこに映った自分の容貌を見て、何かの記憶を喚び起そうとした。……しかし、それは何にもならなかった。磨硝子の表面には、髪の毛のモジャモジャした悪鬼のような、私自身の影法師しか映らなかった。

私は身を翻して寝台の枕元に在る入口の扉に駆け寄った。鍵穴だけがボンと開いている真鍮の金具に顔を近付けた。けれどもその金具の表面は、私の顔を写さなかった。ただ、黄色い薄暗い光を反射するばかりであった。

……寝台の脚を探しまわった。寝具を引っ張り返してみた。着ている着物までも帯を解いて裏返して見たけれども、私の名前はるか、頭文字らしいものすら発見し得なかつ

た。

私は呆然となった。私は依然として未知の世界にいる未知の私であった。私自身にも誰だかわからない私であった。

こう考えているうちに、私は、帯を引きずったまま、無限の空間を、ス——ッと垂直に、どこへか落ちて行くような気がしはじめた。臓腑の底から湧き出して来る戦慄と共に、我を忘れて大声をあげた。

それは金属性を帯びた、突拍子もない甲高い声であった……が……その声は私に、過去の何事かを思い出させる間もないうちに、四方のコンクリート壁に吸い込まれて、消え失せてしまった。

又叫んだ。……けれどもやはり無駄であった。その声が一しきり烈しく波動して、渦巻いて、消え去ったあとには、四つの壁と、三つの窓と、一つの扉が、いよいよ厳肅に静まり返っているばかりである。

又叫ぼうとした。……けれどもその声は、まだ声にならないうちに、咽喉の奥の方へ引返してしまった。叫ぶたびに深まって行く静寂の恐ろしさ……。

奥歯がガチガチと音を立てはじめた。膝頭が自然とガクガクし出した。それでも自分自身が何者であったかを思い出し得ない……その息苦しさ。

私は、いつの間にか喘ぎ始めていた。叫ぼうにも叫ばれず、出ようにも出られぬ恐怖に包まれて、部屋の中央に棒立ちになったまま喘いでいた。

……ここは監獄か……精神病院か……。
 そう思えば思うほど高まる呼吸の音が、^{こがらし} 風のよう^にに深夜の四壁に反響するのを聞いていた。

そのうちに私は気が遠くなって来た。眼の前がズウ——と真暗くなって来た。そうして棒のように強直した全身に、生汗をビッシヨリと流したまま仰向けさまにスト——ンと、倒れそうになったので、吾知らず観念の眼を閉じた……と思つたが……又、ハッと機械のように足を踏み直した。両眼をカッと見開いて、寝台の向側の混凝土壁を凝視した。その混凝土壁の向側から、奇妙な声が聞えて来たからであつた。

……それは確かに若い女の声と思われた。けれども、その音調はトテも人間の肉声とは思えないほど噎^かれてしまつて、ただ、底悲しい、痛々しい響きばかりが、混凝土の壁を透して来るのであつた。

「……お兄さま。お兄さま。お兄さま、お兄さま、お兄さま、お兄さま、お兄さま。……モウ一度……今のお声を……聞かしてエ——ッ……」

私は愕然として縮み上つた。思わずモウ一度、背後^{うしろ}を振り返つた。この部屋の中に、私以外の人間が一人もいない事を承知し抜いていながら……それから又も、その女^{おんな}の声を滲み透して来る、コンクリート壁の一部分を、穴のあく程、凝視した。

「……お兄さま、お兄さま、お兄さま、お兄さま、お兄さ

ま……お隣りのお部屋にいらつしやるお兄様……あたしです。妾^{めかけ}です。お兄様の許嫁^{こひめかけ}だった……貴方の未来の妾^{めかけ}でした妾……あたしです。あたしです。どうぞ……どうぞ今のお声をモウ一度聞かして頂戴……聞かして……聞かしてエ——ッ……お兄様、お兄様、お兄様、お兄様……おにいさまア——ッ……」

私は眼^{まなこ}瞼^{まぶた}が痛くなるほど両眼を見開いた。唇をアングリと開いた。その声に吸い付けられるようにヒョロヒョロと二、三步前に出た。そうして両手で下腹をシツカリと押え付けた。そのまま一心に混凝土の壁を白眼^{びやん}み付けた。

それは聞いている者の心臓を虚空に吊し上げる程のモノスゴイ純情の叫びであつた。臓腑^{ぞうぶ}をドン底まで凍らせずには措^{はか}かないくらいタマライナイ絶体絶命^{ぜつたいぜつめい}の声であつた。……いつから私を呼び始めたかわからぬ……そうしてこれから先、何千年、何万年、呼び続けるかわからない、真剣な深い怨みの声であつた。それが深夜の混凝土壁の向うから私^{わたし}を呼びかけているのであつた。

「……お兄さま……お兄さま、お兄さま、お兄さま。なぜ……なぜ返事をして下さらないのですか。あたしです、あたしです、あたしです。妾^{めかけ}です、あたしです。お兄さまはお忘れになつたのですか。妾^{めかけ}です。あたしです。お兄様の許嫁^{こひめかけ}だった……妾^{めかけ}……妾^{めかけ}をお忘れになつたのですか。……妾^{めかけ}はお兄様と御一緒になる前の晩に……結婚式^{けっこんしき}を挙げる前の晩の真夜中に、お兄様のお手にかかつて死んでしまったので

す。……それがチャント生き返って……お墓の中から生き返ってここにいますのですよ。幽霊でも何でもありませんよ……お兄さま、お兄さま、お兄さま、お兄さま。……ナゼ返事をして下さらないのですか……お兄様はあの時の事をお忘れになったのですか……」

私はヨロヨロと背後に蹣跚した。モウ一度眼を皿のようにしてその声の聞こえて来る方向を凝視した……。

……何という奇怪な言葉だ。

……壁の向うの少女は私を知っている。私の許嫁だと言っている。……しかも私と結婚式を挙げる前の晩に、私の手にかかって殺された……そうして又、生き返った女だと自分自身で言っている。そうして私と壁一重を隔てた向うの部屋に閉じ籠められたまま、ああして、夜となく昼となく、私を呼びかけているらしい。想像も及ばない怪奇な事実を叫びつづけながら、私の過去の記憶を喚び起すべく、死物狂いに努力し続けているらしい。

……キチガイだらうか。

……本気だらうか。

いやいや。キチガイだ、キチガイだ……そんな馬鹿な……不思議な事が……アハハハ……。

私は思わず笑いかけたが、その笑いは私の顔面筋肉に凍り付いたまま動かなくなつた。……又も一層悲痛な、深刻な声が、混凝土の壁を貫いて来たのだ。笑うにも笑えない……たしかに私を私と知っている確信にみちみちた……真

剣な……懐愴とした……。

「……お兄さま、お兄さま、何故、御返事をなさらないのですか。妾がこんなに苦しんでいるのに……タッタ一言、タッタ一言……御返事を……」

「……………」

「……タッタ一言……タッタ一言……御返事をして下されば……いいのです……そうすればこの病院のお医者様に、妾がキチガイでない事が……わかるのです。そうして……お兄様も妾の事が、おわかりになるようになった事が、院長さんにわかつて……御一緒に退院出来るのに……お兄様、お兄様、お兄様、お兄様……何故……御返事をして下さらないのですか……」

「……………」

「……妾の苦しみが、おわかりにならないのですか……毎日……毎夜毎夜、こうしてお呼びしている声が、お兄様の耳に入らないのですか……ああ……お兄様、お兄様、お兄様、お兄様……あんまりです、あんまりです、あんまりです……あ……あたしは……声がもう……」

そう言ううちに壁の向側から、モウ一つ別の新しい物音が聞え始めた。それは平手か、コブシかわからないが、とにかく生身の柔らかい手で、コンクリートの壁をポトポトとたたき音であつた。皮膚が破れ肉が裂けても構わない意気組で叩き続ける弱々しい女の手の音であつた。私はその壁の向うに飛び散り粘り付いているであろう血の痕跡を想

像しながらなおも一心に眼を睜^{ひら}き奥歯を噛み締めていた。

「……お兄様、お兄様、お兄様、お兄様……お兄様のお手にかかって死んだあたしです。そうして生き返っている妾です。お兄様よりほかにお頼りする方は一人もない可哀相な妹です。一人ボッチでここにいます……お兄様は妾をお忘れになったのですか……」

「……」

「お兄様もおんなじです。世界中にタッタ二人の妾たちがここにいます。そうして他人からキチガイと思われて、この病院に離れ離れになって閉じ籠められているのです」

「お兄様が返事をして下されば……妾の言う事がホントの事になるのです。妾を思い出して下されば、妾も……お兄様も、精神病患者でない事がわかるのです……タッタ一言……タッタ一コト……御返事をして下されば……モヨコと……妾の名前を呼んで下されば……ああ……お兄様、お兄様、お兄様、お兄様、お兄様……ああ……妾は、もう声が……眼が……暗くなって……」

私は思わず寝台の上に飛乗った。その声のあたりと思われる青黒い混濁土壁に縋り付いた。すぐにも返事をして遣りたい……少女の苦しみを助けて遣りたい……そうして私自身がどここの何者かという事実を一刻も早く確かめたいという、タマライ衝動に駆られてそうしたのであった。

……が……又グット唾液を嚥^のんで思い止まった。

ソロソロと寝台の上から下り降りた。その壁の一点を凝視したまま、出来るだけその声から遠ざかるべく、正反対の位置に在る窓の処までジリジリと後退^{しりぞ}りをしてきた。

……私は返事が出来なかったのだ。否……返事をしてはいけなかったのだ。

……私は彼女が私の妻なのかどうか、全然知らない人間ではないか。あれ程に深刻な、痛々しい彼女の純情の叫び声を聞きながら、その顔すらも思い出し得ない私ではないか。自分の過去の真実の記憶として喚び起し得るものはタッタ今聞いた……ブウウン——ンンン……という時計の音一つしかないという世にも不可思議な痴呆患者の私ではないか。

その私が、どうして彼女の夫として返事して遣る事が出来よう。たとい返事をして遣ったお陰で、私の自由が得られるような事があったとしても、その時の私のホントウの氏素性や、間違いのない本名が聞かれるかどうか、わかったものではないではないか。……彼女が果して正気なのか、それとも精神病患者なのかすら、判断する根拠を持たない私ではないか……。

そればかりじゃない。万一、彼女が真正銘の精神病患者で、彼女のモノスゴイ呼びかけの相手が、彼女の深刻な幻覚そのものに外ならないとしたら、どうであらう。私がウッカリ返事でもしようものなら、それが大変な間違いの原因にならないとは限らないではないか。……まして彼女が呼びかけている人間が、たしかにこの世に現在している

人間で、しかも、それが私以外の人間であつたとしたらどうであらう。私は自分の軽率から、他人の妻を横奪りした事になるのではないか。他人の恋人を冒瀆したことになるではないか……と言つたような不安と恐怖に、次から次に襲われながら、くり返しくり返し、唾液を嚙み込んで、両手をシッカリと握り締めているうちにも、彼女の叫び声は引つ切りなしに壁を貫いて、私の真正面から襲いかかつて来るのであつた。

「お兄様、お兄様、お兄様、お兄様、お兄様。あんまりです、あんまりです、あんまりです、あんまりです、あんまりです……」

そのかよわい……痛々しい、幽霊じみた、限らない純情の怨みの叫び……。

私は頭髪を両手で引つ攢んだ。長く伸びた十本の爪で、血の出るほど掻きまわした。

「お兄様、お兄様、お兄様。妾は貴方のものです。貴方のものです。早く……早く、お兄様の手に抱き取って……」

私は掌で顔を烈しくコスリまわした。

……違う、違う……違います、違います。貴女は思い違いをしているのです。僕は貴女を知らないのです……とモウすこしで叫びかける処であつたが、又ハッと口を噤んだ。そうした事実すらハッキリと断言出来ない今の私……自分の過去を全然知らない……彼女の言葉を否定する材料の一つも持たない……親兄弟や生まれ故郷は勿論の事……自分

が豚だったか人間だったかすら、今の今まで知らずにいた私……。

私は拳骨を固めて、耳の後部の骨をコッソコッソと叩いた。けれどもそこからは何の記憶も浮かび出て来なかった。それでも彼女の声は絶えなかった。息も切れ切れに……殆んど聞き取る事が出来ないくらい、悲痛に深刻に高潮して行つた。

「……お兄さま……おにいさま……どうぞ……どうぞあたしを……助けて……助けて……ああ……」

私はその声に追いついて立てられるように今一度、四方の壁と窓と、扉を見まわした。駆け出しかけて又、立止まった。

……何も聞こえない処へ逃げて行きたい……

と思ううちに、全身がゾッと粟立つて来た。

入口の扉に走り寄つて、鉄かと思われるほど頑丈な、青塗の板の平面に、全力を挙げて衝突してみた。暗い鍵穴を覗いてみた。……なおも引続いて聞こえて来る執念深い物音と、絶えだえになりかけている叫び声に、痺れ上るほど脅やかされながら……窓の格子を両手で攢んで力一パイゆすぶつてみた。やっと下の方の片隅だけ引込める事が出来たが、それ以上は人間の力で引抜けそうになかった。

私はガッカリして部屋の真中に引返して来た。ガタガタ慄えながら、モウ一度部屋の隅々を見まわした。

私はイッタイ人間世界にいたのであらうか……それとも私はツイ今しがたから幽冥の世界に来て、何かの責苦を受

けているのではあるまいか。

この部屋で正気を回復すると同時に、ホッとする間もなく、襲いかかって来た自己忘却の無間地獄……何の反響もない……聞こゆるものは時計の音ばかり……。

……と思う間もなくこの何者とも知れない女性の叫びに苛責なまれば始めた絶体絶命の活地獄……この世の事とも思われぬほど深刻な悲恋を、救うことも、逃げる事も出来ない永劫の苛責……。

私は踵が痛くなるほど強く地団駄を踏んだ……ベタリと坐り込んだ……仰向けに寝た……又起上って部屋の中を見廻した。……聞こえるか聞こえぬかわからぬ位弱って来た隣室の物音と、切れぎれに起る咽び泣きの声から、自分の注意を引き離すべく……そうして出来るだけ急速に自分の過去を思い出すべく……この苦しみの中から自分自身を救い出すべく……彼女にハッキリした返事を聞かすべく……。

こうして私は何十分の間……もしくは何時間のあいだ、この部屋の中を狂いまわったか知らない。けれども私の頭の中は依然として空虚であった。彼女に關係した記憶は勿論のこと、私自身に就いても何一つとして思い出した事も、発見した事もなかった。カラッポの記憶の中に、空っぽの私が生きている。それがアラレもない女の叫び声に逐いまわされながら、ヤミクモに藻掻きまわっているばかりの私であった。

そのうちに壁の向うの少女の叫び声が弱って来た。次第

次第に糸のように甲走って来て、しまいには息も絶えだえの泣き声ばかりになって、とうとう以前の通りの森閑とした深夜の四壁に立ち帰って行った。

同時に私も疲れた。狂いくたびれて、考えくたびれた。扉の外の廊下の突当りと思うあたりで、カックカックと調子よく動く大きな時計の音を聞きつつ、自分が突立っているのか、坐っているのか……何時……何が……どうなったやらわからない最初の無意識状態に、ズンズン陥ち帰って行った……。

……コトリ……と音がした。

気が付くと私は入口と反対側の壁の隅に身体を寄せかけ、手足を前に投げ出して、首をガククリと胸の処まで項垂れたまま、鼻の先に在る人造石の床の上の一点を凝視していた。

見ると……その床や、窓や、壁は、いつの間にか明るく、青白く光っている。

……チュツチュツ……チョンチョン……チョン……チュツチュン……

という静かな雀の声……遠くに亘って行く電車の音……天井裏の電燈はいつの間にか消えている。

……夜が明けたのだ……。

私はボンヤリとこう思って、両手で眼の球をグイグイとコスリ上げた。グッスリと睡ったせいであつたらう。今朝、

暗いうちに起った不可思議な、恐ろしい出来事の数々を、キレイに忘れてしまっていた私は、そこいら中が急に剛ばって痛んでいる身体を、思い切ってモリモリと引き伸ばして、力一パイの大きな欠伸をしかけたが、まだ充分に息を吸い込まないうちに、ハッと口を閉じた。

向うの入口の扉の横に、床とスレスレに取付けて在る小さな切戸が開いて、何やら白い食器と銀色の皿を載せた白木の膳が入って来るようである。

それを見た瞬間に、私は何かしらハッとさせられた。無意識のうちに今朝からの疑問の数々が頭の中で活躍し始めたのであろう。……吾を忘れて立上った。爪先走りに切戸の傍に駆け寄って、白木の膳を差入れている、赤い、丸々と肥った女の腕を狙いすまして無手と引く。……とお膳とトースト、麵と、野菜サラダの皿と、牛乳の瓶とがガラガラと床の上に落ち転がった。

私はしゃべれた声を振り絞った。

「……どうぞ……どうぞ教えて下さい。僕は……僕の名前は、何と言うのですか」

「……………」

相手は身動き一つしなかった。白い袖口から出ている冷めた赤太根みたような二の腕が、私の左右の手の下で見える見る紫色になって行った。

「……僕は……僕の名前は……何と言うのですか。僕は狂人でも……何でもありません……」

「……アレエ——ッ……」

という若い女の悲鳴が切戸の外で起った。私に掴まれた紫色の腕が、力なく藻掻き始めた。

「……誰か……誰か来て下さい。七号の患者さんが……アレッ。誰か来てエ——ッ……」

「……シッシッ。静かに静かに……黙って下さい。僕は誰ですか。ここは……今はいつ……ドコなんですか……どうぞ……ここは……そうすれば離します……」

……ワ——アッ……という泣き声が上がった。その瞬間に私の両手の力が弛んだらしく、女の腕がスッポリと切戸の外へ脱け出したと思うと、同時に泣き声がピタリと止んで、廊下の向うの方へバタバタと走って行く足音が聞えた。

一所懸命に縋り付いていた腕を引き抜かれて、ハズミを喰った私は、固い人造石の床の上にドタリと尻餅を突いた。あぶなく引っくり返るところを、両手で支え止めると、気抜けしたようにそこいらを見まわした。

すると……又、不思議な事が起った。

今まで一所懸命に張り詰めていた気持ち、尻餅を突くと同時にみるみる弛んで来るに連れて、何とも知れない可笑しさが、腹の底からムクムクと湧き起り始めるのを、どうすることも出来なくなった。それは迎もタマライ程、変テコに可笑しい……頭の毛が一本毎にザワザワとふるえ出すほどの可笑しさであった。魂のドン底からセリ上って、